
濃青のニクード

イシグロミチノブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

濃青のニクード

【Nコード】

N4020W

【作者名】

イシグロミチノブ

【あらすじ】

VOCALOID二次創作、KAITO×女マスター。遠い昔にカイトのマスターとなり彼を愛したことがあるわたしは、七年経過して再びカイトのマスターになる。しかしわたしが再び彼を愛せるわけがなく 過去にサイトで公開していたものを掲載していません。

【10・23】

サトウという苗字がありふれているように、人の名前とは必ずしもその人だけのものではない。

それなのに同じ名前を耳にしたとき、わたしの心臓は止まるかと思った。

「カイト？」

「そう、カイト。ほら、前に言ってたやつだよ」

手軽さが売りのファミレスの一角、向かい側に座った先輩が言った。広い店内に、お客さんはわたしたち以外に二組しかない。夕食前という、微妙な時間だからだろうか。

「ボーカロイドの、ですよね」

「そうそう。さすがに嫁入り道具にはなんないし」

「もう先輩の新曲聴けないなんて、残念です」

「嬉しいことを言ってくれる先輩には、これをプレゼント」

先輩はそう言って残っていたケーキをくれた。わたしは嬉しいことを言っただけで残った後輩なので、「それ、結局お腹いっぱいになっただけでいらなくなったやつですよ」とは言わない。かわりに「ありがとうございます」と喜んでおくことにする。

大学を卒業した先輩は、いつの間にか妊娠していた。できちゃった婚というやつだ。以前より刺々しさがなくなり、柔らかな雰囲気になった先輩はすてきだけれど、それだけはしたくないと思う。最もわたしの場合、できないのほうが正しい。

「ついでにカイトもプレゼント」

「ついでなんて言っちゃ、かわいそうですよ」

「何年も一緒にいれば、そんなこと思わなくなるって」

人と同じ姿をしていて、人と同じように喋って、人と同じように

喜怒哀楽を備えた歌う機械は、けれど人とは絶対的に違っていた。

それは、心がないということ。感情を持つていると言ってもしよせん仮初のもので、結局は人と同じように愛を抱くことはできなかった。それは一緒に過ごす年月が長ければ長いほど、ボーカロイドに対して抱く愛情が深ければ深いほどに思い知らされる、悲しい現実だった。

「初期化して家に送るから、よろしくね」

「わかりました」

「ありがとう。あんたみたいな優しいのがマスターなら、あの子も少しは救われると思うし」

先輩はそう言って笑った。何だかんだ言いながらも、捨てることに罪悪感を覚えるのだろう。

わたしはやっぱ嬉しいことを言っただけで、あげられる後輩なので、「優しいんじゃないかって外面がいいだけです」とは言わず、同じように笑顔でありがとうございますを返しておいた。

「先輩の曲、歌わせてもいいですか？」

「つくづく嬉しいこと言ってくれる後輩には、おごっちゃう」

わたしがケーキを食べ終わったのを見計らってか、先輩はバッグと伝票を持つと席を立った。「いいですよ、申し訳ないです」「いいから黙っておごられなさい」「いいんですか、そんな」「だからいいって」というやり取りをしているうちにレジにたどりつき、先輩はぴかぴかの財布から一万円札と伝票を出す。古びた財布と千円札が定番だった先輩はどこへやら、今ではすっかり裕福な家庭の新妻だ。感心しつつお店を出て、挨拶を交わすと別れた。

先輩は去り際に、もう一度「カイトのこと、よろしくね」と念を押して行った。先輩はわたしが心変わりするのを心配しているのだろう。もし、やっぱいらなさいと言え、カイトは文字通りお荷物となるから。新婚生活にボーカロイドなんて、邪魔者でしかない。

コートの際を左手でかきあわせる。薄手のコートでは、もうそろそろ寒い。いい加減あたたかい上着を買わなきゃと思うけれど、寒

い中をひとりで買い物に行くのは億劫だった。一緒に行ってくれるはずの人には、まだ会えない。

歩きながら、視線を落とす。視界に移る自分の体。左手の甲に残る5センチほどの切り傷は、その部分だけが醜く色を変えている。何年経とうとも、この色が変わることはない。

わたしの中で、カイトと過ごしていた日がいつまで経っても色あせないのと、同じように。

【10.31】

卓上のカレンダーを眺める。丸くて小さな形が愛らしいそれは、10月の終わりを告げていた。ちょうど七年前になるだろうか、わたしがカイトと過ごしていたのは。

まだ高校生だったわたしは、両親から誕生日に贈られたボーカロイドが、嬉しくて嬉しくてたまらなかった。

「カイト。わたしの歌を、歌ってくれる？」

「喜んで、マスター」

初めこそ扱いに慣れず四苦八苦していたが、カイト自身の協力もあり、いつしかわたしの部屋からは歌声がこぼれるようになっていた。恋人の誘いを断ってまで、カイトに歌わせていた時期もあるほどだ。当時のわたしの入れ込みようは、恋と呼んでもよかったかもしれない。

カイトはいつだってわたしに微笑んでくれた。いつだってわたしに優しい言葉をかけてくれた。いつだってわたしを褒めてくれた。

だけど、それだけだった。一年経ってから、ようやくそのことに気づいた。どんなに求めても、愛情を注いでも、カイトが本当の意味でそれを理解することはなかった。まだ高校生だったわたしには、あまりにも受け入れがたい現実だった。

子どものように泣いて、カイトを困らせて苦しめて、追い詰めて、そしてわたしはカイトを手放した。残ったのは、消えない傷跡だった。

【10・31】

カレンダーを眺めていると、チャイムが鳴った。予想したとおり、大きな荷物　先輩からの、カイトだった。箱を開く。その中に横たえられているカイトは、眠っているようだった。肩を叩けば目を覚ましそうな気がした。電源を落としてあるから、起きるはずがないのだけれど。

箱から、自分よりも大きな体を引きずり出す。重い。ちよつとダイエットしたほうがいいんじゃないかな、そんなことを思いながら、どうにか箱から出すことができた。どうせなら電源のある場所、首の後ろをすぐ押せるように梱包して送ってくれたらよかったのに。

マフラーを引っ張り、髪の間から見え隠れする電源を押す。ウーン。そんな感じの音をたてて、ゆっくりと目を開く。機械とは思えない滑らかな動きで起き上がると、無表情にわたしの目をじっと見つめてくる。

1秒、2秒、3秒が経過する。カイトは、突然につこりと笑顔を浮かべた。

「初めまして。僕はボーカロイドのカイトです。あなたが、僕のマスターですか？」

「初めまして。そうね、一応そういうことになってるかな」

「よろしく願います、マスター。たくさん歌わせてください」

正座をしたまま、カイトはぺこりと頭を下げる。その言葉と動作に、昔とは初回の挨拶が違うのだなと思った。昔よりもずいぶん、愛嬌がある。

「使い方や機能など、僕からも説明させていただきますが、よろしければ説明書に目を通してください。場合によっては、突然停止して僕から説明ができなくなることもありますので」

「あなたの使い方はじゅうぶん知ってるから、大丈夫」

「以前、ボーカロイドを使われたことがあるのですか？」

「うん」

うなずくと、カイトは不思議そうに首を傾げた。けど説明はしないで、カイトの言葉を待つ。カイトは空気を読んだかのように、次の説明へと移った。

「マスターの個人情報については、どうなされますか？ 容姿や声などで判別はつきませんが、お名前など基本的な情報を教えていただけると、僕も嬉しいですよ」

「じゃあ、名前だけ。わたしは、サトウ。他のことは、一緒に過ごしながら学んでいって」

「わかりました。マスターの呼び方について、指定はありますか？」

「マスターのままでもいいよ」

「はい、マスター」

カイトは唇に笑みを乗せる。笑顔には人を安心させる効果があると、テレビ番組で放送していたのを思い出す。マニュアル通りの機械に、人と同じような笑顔なんて浮かべてほしくない。

「他に何か、要望などありますか？」

「特にこれといって注文はないんだけど、一つだけ、いい？」

「はい」

「あなたには感情があるそうだけど、わたしの前では笑わなくていい。喜ぶことも怒ることも悲しむことも、しなくていい。組み込まれた感情なんて、わたしは嫌いなもの」

「それでは、マスターに不快感を与えることになりませんか？」

「むしろ、そうやって顔色を伺ってくる姿勢に不快感を抱くよ」

人と同じように感情を抱いていいのは、わたしを愛した果てに殺そうとしたカイトだけだ。

わたしは笑顔を浮かべてみせる。これがあんたの浮かべてる類の笑顔なのよ、そう思い知らせるように。カイトはじつとわたしの目を見ていたが、やがてうなずいた。

「わかりました、マスター」

喜びも怒りも悲しみもない、まったくの無機質な表情だった。

【11・03】

カイトはわたしの言いつけを、守った。初期設定にある柔和な笑顔というものを浮かべなくなり、わたしのご機嫌を伺うことをしなくなった。だからといって気に障ることもしない。

当たり障りのない存在だ。歌うただけに存在する、純粹な意味でのボーカロイド。充分な暇つぶしになった。

「マスター、質問をしてもよろしいでしょうか？」

二時間ほど歌を覚えさせ、歌わせ、その声の調子を整えているとカイトが改まって尋ねてきた。三日ほど経つけれど、初めてのことだった。

「なあに？」

「マスターは一日の大半を家で過ごされていますが、どのような職業に就かれていますか？」

「愛人かな」

妻子ある人からお金をもらい、高級とは言えないけれどそれなりのマンションも与えられ、特にすることもなく過ごしているわたしは間違いなく愛人だろう。

「愛人とは、どのような職業ですか？」

「奥さんがいる男の人の不倫相手」

「不倫は、道徳的に認められないことではないのですか？」

「愛人は知らないのに、不倫は知ってるんだね」

それが何だかおかしくて、わたしは小さく笑った。

部屋を出てキッチンへと向かう。ホットミルクでも飲もうかと思いい、マグカップを用意する。冷蔵庫から牛乳と取り出したところで、わたしの後を追ってきたカイトが、再び質問を口にした。

「マスター。性格の設定は、どうされますか？」

それは、初日にも聞かれたことだった。人と同じように喜怒哀楽を抱くカイトは、それにより性格も設定することができる。陽気だったり真面目だったり暗かったり、様々だ。初期設定は「穏やか」になっているらしい。初日には考えるのが面倒で、後で設定するとはぐらかしたままだった。

「いろいろ考えてみたんだけど」

「はい」

「そのままでもいい」

「感情表現はなし、口調は敬語、顔色を伺わない、純粋なボーカイドであるよう。以上でよろしいですか？」

「うん」

それに慣れたから、というのものもある。だけどそれ以上に、人と同じように感情表現をするカイトだと、七年前を繰り返しているように怖かった。

機械の限界を越えた感情　平たくいえば愛情を理解した末、それを制御できず暴走して壊れてしまうのなら、いつそ純粋な機械であってほしい。

辛い思いをするのは、もういやだ。

「わかりました」

うなずいたカイトには、わたしの望むように感情の片鱗も見えなかった。

服を着替えて髪を整えて仕上げに化粧をする。淡白で冴えない顔をごまかすための化粧だ。これで、どこにでもいるような女の顔ができあがった。

部屋を出る。カイトは、リビングのソファークロケットに横たわっている。歌わせるときだけ電源を入れるようにしているため、普段はまさしく人形だ。

だけど、これが正しい使い方だと思う。常に電源を入れておき家族のように扱う、それが一般的なボーカロイドの扱いだけど、わたしには信じられない。電気代の無駄だし、人形に人間と同じ愛情を注ぐなんて空しいこと、大々的にするものじゃない。

マンションを出て表通りへ出ると、さっそくボーカロイドを連れてくる人の姿が見えた。恋人のように腕を組み、会話を交わしながら歩く姿は、日常のひとつとして馴染んでいる光景だ。

駅へ向かい、電車を乗り継いで、遠い土地へ向かう。二時間ほど揺られてたどりついた土地は、七年前に暮らしていた場所だった。田舎でもないけれど、都会でもない、当時のわたしには退屈でたまらなかった場所。七年前に比べて、ビルが建っていたり大型の商業施設ができたりと、少しだけ開発されている。

それでも青い海だけは変わらず存在していて、その色に心が落ちつくようだった。

駅から少し歩き、町の中心部にありながらも目立たない建物へと足を踏み入れる。地元にくわしく、こんな場所があるなんて知らなかったし、気にも留めなかった場所だ。カイトが、壊れてしまうまでは。

インターホンを鳴らし、招かれた部屋には、壮年の男性がいた。七年という歳月を感じさせない、あの日からのままの姿をしているが、笑顔を浮かべた目尻に皺を見つけて、やはり七年経ったのだなと思った。

「あなたがここへ来る日を、待っていましたよ」

「でも残念ながら、先生が思っているような理由ではないんです」

「それでも、七年待った甲斐がありました」

先生は嬉しそうに笑った。その笑顔に、わたしは胸が苦しくなる。「どうぞ。カイト君の、記憶です」

差し出された、片手ほどの箱を受け取る。と、わたしの手を、先生は両手で包んだ。

「あなたの手の中にあるのは、ただの記憶ではありません。カイト君の、心です。そしてそれをどう扱うかは、あなたの心ひとつです。そのことを、お忘れないうよう」

「……はい。ありがとうございました」

【11.03】

ボーカロイドにも、元々常識というものが備わっている。だから、性格付けをしないとマスターに言われたとき、驚いた。たいていのマスターはボーカロイドに好みの性格付けをする。そして家族、あるいは友人や恋人のように扱う。

けれどマスターは、僕を機械として扱った。歌うことだけを求めた。それは僕にとって驚きであり、戸惑いであり、少しだけ寂しさも感じるものだった。感情を顔に出さないことは可能であっても、僕自身が何も感じなくなるようにすることはできない。感情回路のシャットダウンだけは、できない作りとなっている。僕は完全な機械でなければならぬのに、不便だ。

「マスターは一日の大半を家で過ごされていますが、どのような職業に就かれていますか？」

マスターについて関心があるのはボーカロイドの本能のようなものだ。僕はマスターを知りたい。名前や生年月日というデータだけでなく、好きな食べ物やこだわりなど、様々なことを知りたい。

そう思っで尋ねると、マスターはどうでもいいように言った。

「愛人かな」

「愛人とは、どのような職業ですか？」

「奥さんがいる男の人の不倫相手」

「不倫は、道徳的に認められないことではないのですか？」

「愛人は知らないのに、不倫は知ってるんだね」

マスターが笑った。初日に浮かべた作りものの笑顔とは違った。

自然とこぼれたような、小さな笑い方だった。あまりに嫌味のない笑い方だったので、僕はちよつとだけ、くすぐりたい心地になった。キツチンへ向かったマスターに、僕はまだ尋ねないといけないことがあつた。

「マスター。性格の設定は、どうされますか？」

「いろいろ考えてみたんだけど」

「はい」

「そのままでもいい」

「感情表現はなし、口調は敬語、顔色を伺わない、以上でよろしいですか？」

「うん」

うなずいたマスターの表情が、わずかに曇つた。どうしてそんな顔をしているのだろう。本当は、もっと違う性格にしたかったのだろうか。よくわからない。

「わかりました」

それでも僕には、うなずくしかなかった。マスターの言葉は絶対だから。

目を開くと、いつものように僕を見下ろすマスターと目が合った。あれ、と思う。マスターがいつもと違う服を着ていて、いつもより女性らしさを感じられる髪形をしていて、いつもはしていない化粧をしていたからだ。

こうして見ると、まったく知らない人のようだ。とてもきれいだと思う。だけど見ていて落ちつかない。いつものマスターはどこだろうと、探してしまいそうになる。マスターの色づいた艶やかな唇が、動いた。

「これ、持ってて。ちょっと着替えてくるから」
手渡されたCDを眺める。音楽CDだ。読み取ってしまおうかと思うけれど、勝手なことをすればマスターの機嫌を損ねかねない。思ったけれど、そういえば僕は、マスターのご機嫌を伺わなくても良いと言われていたのだった。

てのひらをCDの上にかざす。情報を読み取る。勢いのある曲だ。ネット回線を経由して楽曲にまつわる情報を集めるけれど、該当はない。マスターが作ったのだろうかと考えるけれど、やっぱり違う、とすぐに考えを打ち消す。この曲を知っている。遠い昔に聴いたことがある。だけど、どこかで

『上手じゃないの』

『そう、いい子ね、カイト』

『あたし、あんたの声、好きよ』

「」
「どうしたの？」

「あ……………」

気づけば、化粧を落とし、室内用の服に着替えたマスターがいた。ソファーにぼんやり座る僕を不思議そうに眺め、少し間を空けて隣に腰を降ろす。と、その視線が、僕の手で止まった。

「ああ、CD、もう読み込んだのね。いくつか、曲が入ってたでしょ」

「はい。これは、どなたの曲ですか？」

「わたしの先輩の曲。あなたを……ううん、あなたに、歌わせてもいいって」

やっぱり、マスターの曲じゃなかった。安心したような、複雑な心境だ。マスターはどんな曲を作るんだろう。マスターの曲を、歌いたかった。

「マスターは、作曲はされないのですか？」

「しない」

短くそう答えて、マスターは「じゃあ曲、歌ってみようか」と僕を促す。

作曲しないのなら、どうして以前、ボーカロイドを使っていたのだろう。そのときの僕は、KAITOは、どんなふうにマスターと過ごしていたのだろう。知りたいと思った。

【11・05】

たった一枚のメモリーカードにおさまるほど、わたしのカイトの人生は薄っぺらいものだったのだろうか。

ソファーベッドに横たわるカイトの傍ら、わたしはお風呂上りで

濡れた髪を乾かしながら、今朝受け取ったデータを思い出していた。あれには、七年前に使っていたカイトの記憶が、人格が、そのすべてが記録されている。脳といってもいいだろう。

もしあれを、今のカイトのデータと入れ替えたなら、あの日のカイトが蘇るのだろうか。理論的にはそうなるし、故障のためメモリーだけを入れ替えるボーカロイドだっている。だけど、わたしには信じられなかった。わたしにとってのカイトは、あの日死んだのだ。カイトを見る。先輩のお下がりだから多少古びた感じはするけれど、それでも手入れされ続けてきたのだろう。痛んだ箇所は見受けられないし、歌わせてみても、きれいな声を出す。愛情を持って使われてきた証拠だ。

わたしは、このカイトに対して、先輩がそうしていたように大切に扱えるだろうか。考えずとも答えは出ている。できないから、まったくの機械としているように頼んだのだ。

わたしの中のカイトは、七年前に恋したカイトただひとりだけだから。

あのとき好きになってしまったカイト以上に、好きになれるカイトなんていない。同じように好きになれる誰かなんていない。

カイトが愛情を理解して壊れてしまったように、きっと、わたしも壊れてしまったのだ。

【11・07】

先輩の曲を歌わせるとき、カイトは一瞬だけけど、怪訝な顔をするときがあった。感情を表現しないようにと初日に言ったし、歌わせるとき以外、表情が動くことはない。もしかして、無意識がボ
ーカロイドにもあるということだろうか。

「この曲、きらい？」

「いえ、特に好き嫌いはありません」

「そう。まあ、いつか。じゃあ次はこれにしよう」

試しに、最近テレビでよく流れている曲を歌わせてみる。数日前から何度か歌わせていたから、カイトにとっては慣れた曲だ。と、今度は相変わらずの無表情で、すらすらと歌ってみせた。

「……じゃあ、これはどう？」

今度は、先ほどとは別の先輩の曲を歌わせてみる。これだって、何度か歌わせたことがあるから、慣れているはずだ。なのにやっばり、カイトは歌い出しの一瞬だけ怪訝な顔をした。

「この曲、どう思う？」

「マスターの先輩が作られた曲ですね。僕はその人を知りませんが、強気な性格なのかなと思います」

そう答えたカイトの表情は、どこか柔らかなにも見えた。

「作品にはその人が出るといってもんね」

初期化しても、完璧に消すことはできないのかもしれない。カイトにとっては先輩が最初のマスターで思いいれもあつただろうし、何より愛情を持って使われただから、その思いが消えずに残っているのかもしれない。

「ただ先輩はカイトをいらないと云っているし、」まだカイトは先輩を慕っているから「なんて言って返却しても、先輩には迷惑な

だけだ。

だからといってわたしは、このカイトを愛せない。愛されず必要とされないボーカロイドなんて、不憫だ。いつそ廃棄したほうが、カイトのためになるのかもしれない。

「マスター、顔色が優れないようですが」

「ちよつと風邪気味かも……………薄手のコートしか、持ってないから」

「買いに行きたい、と思った。あの人と一緒にコートを買いに出かけて、映画を観て、食事をして、またこの部屋に来てほしい。」

左手に目を落とす。醜い傷跡。それすら口付けてくれて、指輪をはめてくれた。だけどきつと、もう口付けてもらえない。

「新しいコートを買われてはどうですか？」

「そうね」

「僕でよければ、いつでも一緒に行きます」

その言葉に驚いたのは、わたしだけではなかった。カイトもまた、自分で言ったのに不思議そうな顔をしていた。相変わらずわたしの言いつけ通り無表情ではあるけれど、いつもの無表情とどこか違うことくらい、わかる。

わたしが何も答えられずにいると、カイトは言った。そのころにはもう、完璧な無表情に戻っていた。

「今日はもう休まれてください。風邪を引かれては、大変ですから」

マスターが、いつも誰かを待っているのは知っていた。それが愛人として相手している人であることも。一日中見ていればわかることだ。

僕に歌わせているかと思えば、ぼんやりと左手の薬指の指輪を眺めていたり、部屋のボードに貼ってある写真を見つめていたり、そんなことばかりだ。かと思えば、普段はファッション誌ばかり眺めているのに小説を読んでいたりする。それも、推理小説だ。数ページ読んで放り出し、だけどやっぱり手に取って読み、もう一度放り出して表紙を睨んでいる。

あの人が読んでいるんだろう。だからマスターも読んでみたのだろう。だけどテレビでニュースだけは見ないマスターが、頭を使うような本なんて読めるはずがない。そもそも読むこと自体好きではないようで、雑誌だっておそらく服やアクセサリーだけを見つめているのだろう。

それを見ている僕に気づいて、どこか気まずそうに目をそらして、「この歌、歌って」とCDを差し出してくる。はぐらかされた。何を、なのかわからないけれど、そう感じる。ごく稀に、CDのかわりに「この服どうかな、わたしに似合うと思う?」と話しかけてくるけれど、僕は何だつてマスターに似合うと思つので、そればかり答えていたら聞かれることはなくなった。少し、寂しい。

そうして、はぐらかすように渡されたCDの曲、マスターの先輩が作ったという曲を歌うたび、僕はどうしようもない気持ちになる。逃げ出したいような、どこかわからないけれど懐かしい場所に帰りたいような、よくわからない感覚だ。

「この曲、きらい?」

見透かされたように尋ねられて、僕は危うく素直に心情を告白してしまうところだった。きらいじゃない。むしろ、懐かしい。だけどすごく痛くなる。どこがなんてわからない、どうしたらいいのかわからない、手の打ちようのない痛みだ。

「いえ、特に好き嫌いはありません」

「そう。まあ、いつか」

「ただそのあと、また先輩の曲を歌わされて、僕はやっぱり痛みを感じた。逃げたい。帰りたい。泣きたい。ただどこにいたい。わからない感覚が頭の中を駆け巡る。」

「この曲、どう思う？」

「マスターの先輩が作られた曲ですね。僕はその人を知りませんが、強気な性格なのかなと思います」

「一瞬だけ、記憶の端を誰かの影が過ぎった。マスターとは全く違う雰囲気、女の人。誰だろう。」

「作品にはその人が出るっていうもんね」

「マスターはそう言わずしてくれた。同意を示してもらえただけで嬉しい。でも僕にはそれを表現する術がない。嬉しいことを伝えたい気もしたけれど、それでは感情表現をすることになるので、堪えた。」

「ただマスターはうなずいたきり、黙り込んでしまった。心なしかその顔色が優れない。体調でも悪いのだろうか。」

「ちょっと風邪気味かも………薄手のコートしか、持っていないから」

「マスターの視線が動く。左の手の傷跡を見、指輪を見る。ああ、そうか。マスターはやっぱりあの人のことを考えているんだ。今、側にいるのは僕なのに。」

「新しいコートを買われてはいかがですか？」

「そうね」

「あっさりとした答えは、諦めを表現しているようだった。どうしてマスターの好きな人は、ここにいないのだろうか。僕がこの家に来たから、ただの一度もその人の気配を感じたことがない。僕の電源が落ちている間に来たかもしれないけれど、形跡さえないのだ。どうしてあの人は、寂しそうなマスターを一人にしておけるのだろうか。愛人というくらいだから、好きな人のだろうに、大切にしないなんて。疑問が募るばかりで、僕には何一つわからない。」

「僕でよければ、いつでも一緒に行きます」

思わず言った言葉に、僕は自分でも戸惑った。どうして、こんな言葉が浮かんだのだろう。マスターも驚いている。当たり前だ。純粹な、歌うためだけのボーカロイドでいるよう設定したのに、これじゃあまるで一般のボーカロイドと同じだ。

「今日はもう休まれてください。風邪を引かれては、大変ですから」僕の言葉にマスターは「そうする」とうなずいた。部屋を出ると所定の位置となったソファーベッドへ向かい、電源に手を伸ばす。歌うためのボーカロイドが用もなしに起動しているなんて、おかしいからだ。

次に起動したときは、もっと、マスターの望むボーカロイドらしく振る舞えるようにしなければならぬ。

【11・07】

薄々気づき始めている。この指輪はもう意味を持たなくて、この部屋だっておそらく手切れ金代わりになるんだろうと。それでも、もしかしたらという淡い期待がぬぐいきれず、この部屋で無為に時間を潰す日々が続いている。もしかしたら、明日にはあの人から電話が入るかも。

もしかしたら、明日にはあの人に来てくれるかも。

もしかしたら、明日にはあの人から贈り物が届くかも。

そんなどうしようもないくらいのもしかしたらを繰り返して、気づけば一ヶ月が過ぎていた。一ヶ月も会っていない。連絡さえ超越

してくれない。こんなことは初めてだ。今まで、最低でも二週間に一度は連絡をくれて、会うことができ、会えない時間を埋めることができた。

結婚なんてできなくていい。子どもだっっていらない。好きな人の幸せを壊したくないから。そんなきれいごとを眩きながら、本当はあの人と結婚したかったし子どもだっってほしかった。お嫁さんになっって、ごく普通の幸せを得たかった。

わたしには、勇気がなかったんだ。あの人を持つもの全てを壊して、奪い取るだけの勇気が。あの人が大切に思うものと張り合っって戦うだけの勇気が。

いつそ誰かに臆病者だと言ってもらえたなら、諦めがついたのかもしれない。そうやって他人任せなところが、やっぱり臆病だ。

【12・02】

カイトは相変わらず機械らしくて、わたしは相変わらずあの人を待ち続けていて、新しいコートは買えないまま二週間が過ぎた。1月も終わり、どんどん寒くなり始めている。

このまま変わらず過ぎていく気がしていたとき、突然その人はやつて来た。

「かわいい後輩のためにケーキ持って来たわよ」

「先輩」

「駅前に新しくできたお店のなんだけど、かなりおいしいの。あなたにもおすそ分け」

「ありがとうございます」

駅前に新しいお店ができていたことなんて、もちろん知らない。

そんなわたしに、先輩の来訪はとても新鮮に感じられた。それと

同時に、相当な危機感も。

先輩の曲を歌わせるたびに怪訝な顔をするカイトに、先輩を会わせるなんて、カイトが壊れたりしないだろうか。その上、カイトに機械らしく振る舞うよう言いつけてるなんて知れたら、見放されてしまつかもしれない。

“あんたみたいな優しいのがマスターなら、あの子も少しは救われると思うし”

以前、カイトを譲ってもらったことになったあの日の言葉が、はっきりと蘇る。だめだ。カイトに会わせられない。でも先輩はカイトの様子を見に来たに違いない。逃げ場なんて、なかった。

「お邪魔しまーす。相変わらず物の少ない家よねえ」

先輩はケーキの箱をわたしに押し付け、ずかずかと家の中に上がりこむ。リビングには、起動させたままだったカイトがいる。こん

なことなら、歌なんて歌わせず電源オフにしとけばよかった。

後悔は先に立たないもので、先輩はかちやりとドアを開けるとりピングへ入って行った。

「いたいた、カイト。久しぶりねーって言っても、覚えてるわけないか」

ソファアーベッドに座ったままだったカイトが、突然の訪問者に目を丸くする。ここで通常のカイトなら人懐っこい笑顔を浮かべて「初めまして」と挨拶するのだろうけれど、機械らしさを求めたカイトに、そんなことができるわけがない。

どうなってしまうんだろう。逃げ出したい気持ちでケーキの箱をしつかり抱えるわたしと、一瞬だけカイトの目が合った、気がした。「初めまして。マスターのご友人ですか？」

「そ。あたし、あいつの先輩なの」
だけどカイトは、予想とは裏腹ににっこりと笑顔を浮かべてみせた。初回起動時の、あの人なつっこい笑顔そのものだ。わたしは呆然として、カイトを見つめる。

「ほら何突っ立ってんの。ケーキ食べようよ」

先輩はいつの間にか、カイトの隣に座って我が家のようにくつろいでいる。上着だっけいつの間に脱いだんだろう。

「え、は、はい」

テーブルにケーキを置くと、慌ててリビングへ向かいお茶の用意をする。

「マスター」

「！」

「手伝いますよ」

いつの間にか、ソファアーに座っていたはずのカイトが、背後に來ていた。心臓がばくばくと鳴る。普段は絶対に浮かべないような柔らかな表情を顔に張りつけて、わたしを見ている。

「いや、えっと」

「やっぱカイトって気が利くのよねー」

ソファーから先輩の間延びた声が届く。何も知らないからこそ
の呑気な声が、逆にわたしをハラハラさせた。カイトはやはり穏や
かな表情のまま、先輩を振り返って言う。

「紅茶とコーヒーとココアがありますが、どれにしましょうか？」

「あ、あたしコーヒーで」

「マスターはどれがよろしいですか？」

今度はわたしに、その表情を向ける。胸がざわついた。そんな顔
しないでほしい。これじゃあ七年前のカイトみたいだ。それに無表
情でいるよう設定したはずなのに、どうして。

「や、あの、自分ですから」

「お気を遣わないでください。僕がしたいんです」

「……じゃあ、紅茶、お願い」

先輩の視線を感じて、わたしは問いたただすこともできずそう呟く
と、カイトの側を離れた。ソファーに座っている先輩の隣に腰かけ
る。先輩はカイトに聞こえないよう小さな声で、言った。

「仲良いじゃん。やっぱあなたに渡して正解だったわ。あたしのと
こにいたときより、ずっといい顔してる」

「そうですか？」

「うん。ずっと一緒に過ごしてたから、あたしにはわかる。カイト
はあなたのこと大好きね」

先輩はそう言って、笑った。裏表がなくて明るい、わたしの好き
な笑顔だ。だけどその笑顔を見て、わたしは胸が張り裂けそうだっ
た。カイトがわたしに「好き」なんて感情は持ち得ない。わたしの
言いつけどおり、純粋なボーカロイドであろうとしているのだから。
カイトはきつと、今でも先輩を慕っているはずだ。

「先輩、あの」

「どうぞ。コーヒーと、紅茶です」

「ありがとう、カイト」

カイトがテーブルにティーカップを置く。ことんという音を聞き
ながら、わたしは言い出すきっかけを失ってしまったと思った。先

輩の勘違いを訂正しなければ、カイトが不憫だ。

先輩が帰るときに、駅まで送っていこう。そのとききつと、二人きりになれる。駅までは15分ほど歩かなければいけないし、充分に時間はあるはずだ。

「シヨートケーキとモンブラン、あとガトーシヨコラにチーズケーキ。さ、どれがいい？」

「先輩から選んでください」

「いいのいいの。これはあんたに対するお礼みたいなもんでもあるし。カイトも食べる？」

「いえ、僕は結構です」

そのやり取りで、わたしは初めてカイトがものを食べられるのだと知った。そういえば、飲食店でもボーカロイドの姿を見かけたことがある気がするけれど、連れ回しているのだろうとしか思わなかった。

七年前とは、違う。あのとときのカイトは飲食できなかつたから、離れなきゃいけない夕食の時間がゆうつつだったくらいだ。また一つ、人間に近づいている。

「ええと、じゃあシヨートケーキ」

「あたしはチーズケーキもらうね。あとはあんたにあげるから」

「では、僕はこれで失礼しますね」

カイトが軽く頭を下げて、部屋を出ようとする。内心ほっとした。待って、あたしカイトと話したいの。座って

けれど先輩呼び止められ、しかもテーブルを挟んだ向かいのイスに座るよう示されて、結局カイトは同席することになった。せっかく先輩に訂正できるチャンスだと思ったのに。

「ねえ、いつもどんなの歌ってんの？」

「マスターはあなたの曲を歌わせてくれますよ」

「あんた本気であたしの曲歌わせたの？ 恥ずかしいじゃん」

先輩はそう言いながらも、まんざらではないようだった。顔が緩んでいる。

「自分が作った曲歌わせなよ。最近は何も作ってないって言うてたけど、昔のがあるじゃん。あのすっごい切ない曲」

「や、あれは」

「僕もマスターの曲、歌いたいです」

「やっぱそうよねえ。カイトだって、大好きなマスターの曲のがいに決まってるって」

先輩はからからと笑った。嫌味でもなく単純にそう思ったから言うてるんだ、そういう人だから。

わたしは愛想の良いカイトに薄気味悪さを覚えながらも、それだけはできない、と思った。わたしが昔作った曲は、すべて最初のカイトのためのものだからだ。カイトのことが好きで好きでどうしようもなく、カイトのことしか考えられなかったときに、カイトに贈った歌だ。他の誰にも、あげられない。あげたくない。

曖昧な返事をしているうちに話は横道に逸れて、旦那さんとの惚気話になり、語ったことで満足した先輩は「そろそろ帰るわ」と席を立った。

「ケーキ、ごちそうさまでした」

「いいって。今度はどっか食べに行こ、いろいろいいところ見つけたから」

はい、とうなずく。こんな生活を送っているせいか、あまり人と接する機会のないわたしにとって、連れ回してくれる先輩はいつだって新鮮だった。先輩にいいところを教えてもらったら、あの人に教えてあげよう。

駅まで送ります、そう告げるはずだったけれど、カイトが後ろからぐいとわたしの肩を引いた。

「!？」

わたしの肩に手を置いたままで、カイトは先輩に言った。

「よろしかったら、送りますしょうか」

「ん、大丈夫大丈夫。旦那に近くまで迎えに来てもらうから。もうちょっとで仕事終わる時間だし」

「そうですね」

それだっただらせめて、その近くまで送りたかったけれど、カイトがうなずいたせいで何も言えなかった。肩に置かれた手が、熱い。「じゃあ、またそのうちカイトにも会いに来るから。この子のことよろしくね」

「せ、先輩、何言ってる……」

「はい、もちろんです」

カイトは迷わずうなずくと、にっこりと微笑む。カイトの笑顔に、傷跡がうずいた。

先輩はよし、とうなずくと、手を伸ばしてわたしの頭をぐしゃぐしゃに撫でた。髪がめちゃくちゃになる。

「わ」

「ぐしゃぐしゃ。ダサッ」

「もう、先輩っ」

「あははっ。じゃーね、元気にしてなよ」

人の頭をぐしゃぐしゃにするだけしておいて、先輩は去って行った。わたしは手櫛で髪を整えながらも、先輩の気遣いを嬉しく思う。きびすを返して、カイトがまだそこに立っただけはっとした。笑顔はどこへやら、もう無表情に戻っている。少しだけほっとしたけれど、不可解さが胸にひっかかって、まだ安心はできなかった。

「……どうして」

「何がですか」

「感情表現するなって言ったでしょ、何なのさっきの」

もっと違う問い方があったと思うけれど、ついそんな言い方になってしまった。カイトが、先ほどとは打って変わって、淡々とした声音で答える。

「あなたが僕に、助けを求めるような目をしていたからです」

「わたし、そんなつもりじゃ」

「先ほどの先輩と呼ばれていた人は、僕の前マスターなのでしょっつ」

「カイト……」

何も言葉を返せなかった。沈黙を肯定と受け取ったカイトは、そこでようやく微笑みを浮かべた。小さなそれは、どこか諦めにも似たものを感じさせた。

「あなたは優しいけれど、臆病だ」

言い放つと、カイトはわたしに背を向けて、部屋へと戻って行った。わたしは玄関に立ち尽くしたまま、ぎゅっと唇を噛みしめる。気がつけば指先で触れていた左の指輪は、ただ光るだけで慰めもしてくれなかった。

【12・02】

その人の姿を見た瞬間、メモリーの断片が光った。それは先輩という人の曲を歌うたびに感じていた感覚と、きれいに一致するメモリーだった。消されたはずのデータの断片が、みるみるうちに形を取り戻していく。

「いたいた、カイト。久しぶりねーって言っても、覚えてるわけないか」

マスター。思わずそう呼びそうになったかわり、僕は記憶通りの僕を演じることにした。この人の前では、通常タイプの僕で振る舞うのが正しい。そう確信した。

「初めまして。マスターのご友人ですか？」

「そ。あたし、あいつの先輩なの」

そうだ。知っている。この人のことも、今のマスターのことも。

この人がマスターだったとき、今のマスターの話聞いたことがある。マスターは爪の手入れをしながら、その後輩について話してくれた。

「心配なのよね、心だけどっか置いてきたみたいな感じでさ。昔作ってたって曲聴かせてくれたんだけど、めっちゃくちゃ切なかった。なんかあったんだろうなって思うんだけど」

「その人のお名前は、何ていうんですか？」

「つなげて読むと面白い名前だから本人はいやがってたけど、あたしはあの子の名前、けっこう好きなんだよね」

だからマスターは、初回起動時に苗字しか名乗ってくれなかったのだ。どんな名前なのか気になるけれど、本人がいやがっているのだから仕方がない。

リビングに向かったマスターを追うと、声をかける。

「手伝いますよ」

びくりとして振り返ったマスターは、ずいぶんと驚いているようだった。僕が近づいたことにも気づかないなんて、きっと、先輩が僕にとって前のマスターだからに違いない。もし僕がその事実気づいたらと不安なのだろう。

もう思い出してしまったし、傷ついたりはしないのに、優しい人だ。そう考えると、自然と笑顔がこぼれた。むしろ今のマスターに引き取ってもらえて、嬉しいくらいなのに。

「いや、えっと」

「やっぱカイトって気が利くのよねー」

「紅茶とコーヒーとココアがありますが、どれにしましょうか？」

「あ、あたしコーヒーで」

「マスターはどれがよろしいですか？」

今この瞬間だけは、普段からしたかったように、マスターに尽くすことができる。マスターはきつと僕が一芝居打つてると考えてるだろうけれど、そんなことはない。僕はできることなら、普段からこうしてマスターと過ごしたい。これはボーカロイドとしての本能

であり、彼女と過ごして好意を抱いた末の欲求だ。

「や、あの、自分ですから」

「お気を遣わないでください。僕がしたいんです」

「……じゃあ、紅茶、お願い」

マスターは渋々といった様子で呟くと、先輩の元へ戻って行く。それから並んで話をしていたけれど、ふとある言葉が耳に届いた。

「カイトはあんたのこと大好きね」

やっぱり前のマスターは、僕のことをよくわかっている。もちろん今でも前のマスターは好きだけれど、今のマスターに対してはまた違った感覚で好きだと思っている。前のマスターにこの気持ちで相談できれば、これがどういう感情なのかわかるだろうけれど、自分で考えるしかない。

「先輩、あの」

マスターが何を言おうとしたのか、もちろん僕にわかるはずがない。ただと言わせてはいけないような気がして、慌てて二人の元へ向かった。

「どうぞ。コーヒーと、紅茶です」

「ありがと、カイト」

マスターは何か言いたげにしていたけれど、諦めたようだった。

「では、僕はこれで失礼しますね」

キーキを選ぶ二人を尻目に、やはりここは退出するべきだろうと頭を下げる。と、呼び止められた。

「待って、あたしカイトと話したいの。座って。ねえ、いつもどんなの歌ってんの？」

「マスターはあなたの曲を歌わせてくれますよ」

「あんた本気であたしの曲歌わせてたの？ 恥ずかしいじゃん」

むしろ、そればかりだ。前のマスターの曲は嫌いじゃないけど、どうしても痛くなるから、できれば避けたい。思い出した今ならまだ痛みにも耐えられる気がするけれど。

「自分が作った曲歌わせなよ。最近は何も作ってないって言ってたけど、

昔のがあるじゃん。あのすっごい切ない曲」

「や、あれは」

「僕もマスターの曲、歌いたいです」

「やっぱそうよねえ。カイトだって、大好きなマスターの曲のがいかに決まってるって」

「まあ、新しく何か作れたら」

作る気もないのに、マスターはそう言った。ずるい人だ。作る気がないとわかっていても、それでも僕は期待してしまうというのに。それからしばらく二人は、というより前のマスターが話を続けて、マスターがそれに楽しそうに相づちを打って、前のマスターは帰ることになった。

「今度はどっか食べに行こ、いろいろいいところ見つけたから」

そう言っただけ靴を履き終えた前のマスターに、マスターが何か言おうと口を開く。僕は咄嗟に、彼女の肩に手を置いて、言葉を遮った。思わず触れてしまった肩は、思っていたよりずっと細かった。

「よろしかったら、送り返しましょうか」

「ん、大丈夫大丈夫。旦那に近くまで迎えに来てもらうから。もうちょっとで仕事終わる時間だし」

「そうですか」

「じゃあ、またそのうちカイトにも会いに来るから。この子のこと、よろしくね」

「せ、先輩、何言ってる……」

「はい、もちろんです」

「よし」

うなずくと、手を伸ばしてマスターの頭をぐしゃぐしゃに撫でた。柔らかそうな髪がめちゃくちゃになったけれど、マスターは嬉しそうだった。

「ぐしゃぐしゃ。ダサッ」

「もう、先輩っ」

「あははっ。じゃーね、元気にしてなよ」

ドアが閉じられて、にぎやかな気配が去っていく。マスターがくると振り返って、とたん、嬉しそうな顔が強張る。僕もまた今の僕に戻って、マスターの言いつけ通り無表情に戻る。

本当はマスターに、僕といるときにも嬉しそうにしてほしかったし、僕だって笑顔のまままでいたかった。

「……どうして」

ぼつりとこぼれた声は、僕を責めるというよりは僕に戸惑っているようだった。

「何がですか」

「感情表現するなって言ったでしょ、何なのさっきの」

「あなたが僕に、助けを求めるような目をしていたからです」

「わたし、そんなつもりじゃ」

「先ほどの先輩と呼ばれていた人は、僕の前のマスターなのでしょ
う？」

「カイト……」

マスターの表情が泣き出しそうに歪んだ。言うつもりなんてなかったのに、どうして言うってしまったのだろう。マスターにこんな顔をさせたかったんじゃない。ただ、もつと僕にいろんなことを話してほしいと思ったただけだったのに。

「あなたは優しいけれど、臆病だ」

言葉は止まらなかつた。放った言葉がマスターの心に突き刺さるのが、はっきりと見えた。僕はその場にいられなくて、逃げ出した。臆病なのは、僕だ。

【12・07】

カイトを起動できずにいる。首の後ろのボタンを押すだけでいいのに、それができない。たったそれだけのことが、こんなにも難しく感じるなんて。

臆病だと、言っただけでよかった。まさかカイトに言われるなんて思っただけでよかったし、その言葉は、自分でも思いの他、胸に突き刺さった。事実を指摘されるのは、すごく痛い。

ソファアーベッドに横たわるカイトは、どうやってたって七年前のカイトと被って見えることはなかった。容姿と声は全く同じで、浮かべる笑顔だって同じはずなのに、不思議と全く違うものに思えるはずだった。

だけどそれが、コートと一緒に買いに行くと言われて以来、ふと似たものを感じるが増えた。わたしに向けたあの笑顔や、声、そして手のあたたかさが、わたしの愛したカイトに似ている。錯覚だと自分に言い聞かせれば言い聞かせるほど、似ていった。

手の中のメモリーカードに視線を落とす。これを、目の前のカイトのカードと差し換えれば、七年前のカイトが蘇る。一緒にごはんを食べて、コートだって買いに行ける。寒い思いをしなくて済むのだ。

“僕でよければ、いつでも一緒に行きます”

だけど、できない。感情表現を奪ったわたしに、カイトはそう言ってくれた。

“あなたは優しいけれど、臆病だ”

わたしが誰かに言っただけだと思っていた言葉を、カイトは突きつけてくれた。

このカードは捨てなきゃいけない。持っていれば、いつか必ず今

のカイトのデータと差し換えてしまう。わかっている。なのに体は動いてくれない。むしろ、カードの場所はどこだっただろうと、いやな記憶を探し出す。

メモリーカードは、額。前髪の付け根に小さな差し込み口があって、目立たないから必死に探さなきゃいけない。ゆっくりと記憶が引き出される。

七年前。わたしは、カイトに殺されそうになったのだ。

《10・23》

わたしがカイトを、カイトがわたしを好きになるのに、そう時間はかからなかった。カイトを好きになって歌ばかり歌わせて、結局、当時付き合っていた人とも別れてしまった。

「よかつたんですか？」

「うん。だってわたし、カイトがいちばん好きだもん」
「僕も、マスターがいちばん好きです」

別れるころには、わたしの心は完璧にカイトに移っていたので、痛みなんて感じなかった。カイトが好きだと言ってくれる、微笑みかけてくれる、抱きしめてくれる、その事実を満たされていた。

ただと違和感を覚え始めたのは、誕生日だった。その日は17歳の誕生日で、いろんな人がお祝いをしてくれた。家族、友だち、そして知らない人も。

「見てカイト、隣のクラスの男の子からネックレスもらっちゃった」
カイトに見せたのは、嬉しかったからじゃない。見せびらかした

かったわけでもない。妬いてほしかった。自分以外の男からものを貰うなど、言ってほしかった。だけどカイトは、いつもと同じ笑顔を浮かべると、言った。

「わあ、よかったですね。きっとマスターに似合いますよ」

「……………うん、そうかな」

違う。似合うなんて言わないでほしい。だけどカイトはにこにことして、続ける。

「ええ。僕がつけてあげましょうか？」

「ううん、いいの。ね、それよりまた歌ってくれる？」

「もちろんです。僕にできるのは、マスターのために歌うことです。今日はお誕生日ですし、お祝いの歌を歌いますね」

それからまた、幾度かそういうことがあった。一緒に歩いていてわたしがナンパされると、カイトは「マスターって人気なんですね」と嬉しそうに笑った。そのたびわたしはどうしていいのかわからなくて、怒ったり泣いたりすねたり、カイトを困らせてばかりだった。やきもちを妬いてと言ってみたけれど、カイトは「やきもちって何ですか？」と困惑していた。

「どうしてわかってくれないの！？　ねえカイトはわたしを好きなんだでしょ、だったらなんで嬉しそうにするの？　わたしのこと独り占めしてよっ」

「マスター……………」

「わたしはカイトが他の人に触られるのなんていやだし、わたしのことだけ見ててほしいの！　他の子に笑いかけたりしないで、わたしのだけのカイトでいて！　わたしのことちゃんと捕まえて……………！」
我慢していた思いは少しずつ鬱積していつ、ついには爆発してしまった。わたしは泣いて喚いてやっぱりカイトを困らせて、カイトは駄々をこねるわたしを、オロオロしながら抱きしめるだけだった。

カイトには、理解できないのだ。独占欲というものが、嫉妬という感情が、愛情というものが、どうしたって理解できないのだ。そ

の事実は受け入れがたく、絶望的だった。

それから数日間、わたしは自室に引きこもった。家族はもちろん、カイトさえ部屋に入れなかった。生まれて初めての、大きな失恋と
いってよかっただろう。

カイトにはどうやって伝えて伝わらない。理解してもらえない。それなら割り切って付き合うか、いつそ側に置くべきではないのだ。ただどやっぱり、カイトに側にいてほしい。カイトがいない世界なんて悲しすぎる。受け入れてもらえないのに側に置くなって、それこそ辛いのではないか。ずっとずっと、そんなことを考えていた。

小さなノックが響いたのは、深夜だった。家族は寝静まっている時刻に、わたしはぼんやりとベッドの中、壁を見つめていた。

「……マスター。開けてください」

わたしは返事もせず、壁を見つめ続けた。数秒だっただろうか、数分だっただろうか、わからない。ややあつて、カイトが言った。

「僕、わかつたんです。マスターの言っていた意味が。僕はマスターのためだけの存在で、マスターは僕だけのものだって」

「……嘘だ。カイトにわかるはず、ないよ」

「本当です。今度からあなたに近づく男がいれば、容赦なく排除します。もしあなたが僕以外の人を見ることがあれば、あなたであっても許しません」

自分の耳を疑った。これは本当にカイトの言葉だろうか。マスターには絶対に危害を加えないはずの、ポーカロイドだろうか。

だけどそんなまっとうな疑問も、嬉しさの前には消し飛んだ。わたしの思いがようやくカイトに伝わったのだと、嬉しくて嬉しくてたまらなかった。

本当は、そのときにちゃんと考えるべきだったのだ。ポーカロイドの本能さえ凌駕した、カイトの思考回路について。

ベッドから抜け出すと、ドアを開ける。暗い中でカイトの青い目が輝いて見えた気がした。

「マスター。会いたかった。僕の、僕だけの××」

「カイト」

初めて呼ばれた名前は、本当にあのいやな名前だろうかと思うくらい甘美な響きを持っていた。

カイトがわたしを抱きしめる。わたしも、カイトの背中に両手を回す。いつもなら優しく抱きしめてくれる腕は、離すまいときつく、苦しいほどに力を込めてきた。だけどその苦しさを嬉しく、わたしは泣きながら彼にすがりついた。

やがてその腕が動いて、わたしの頬に触れる。導かれるように上を向かされて、考える間もなくキスをされた。カイトとキスするのは初めてではなかったけれど、深く奪われるようなキスは初めてだった。舌先から腰に、腰から足に痺れが走る。

「カイト……」

「xxにもつと触れたい」

カイトはわたしの返事も待たず、部屋のドアを閉ざすと、ベッドに押し倒してきた。カイトらしくない、強引な態度に戸惑ったけれど、ずっと願っていた現実に心臓は張り裂けそうなほど高鳴っていた。

「好きだよ、xx。愛してる」

痛みの中で聞こえた声はあまりに切なく、わたしはようやくカイトが愛情を理解してくれたのだと思った。

《11・08》

それから二週間、わたしはカイトと幸せな時間を過ごした。カイト

トはいつだつて優しくて穏やかで、渴いた心を満たしてくれた。

問題が起きたのは、二週間目の夕方だった。両親は仕事で、カイトは充電のためのスリープモードで、実質、家に一人の状態だった。チャームが鳴って、つい、誰が来たのかも確認せず家のドアを開けた。そこには以前付き合っていた、カイトがきっかけで別れた人だった。

「何しに来たの」

「少しでいいから、話できないかと思って」

「何の話？」

家にも部屋にも入れるつもりはなかった。どうやって早く帰ってもらおうか、そればかり考えていた。

「お前さ、ボーカロイドにはまってるんだろ。あれって結局、機械じゃん。人間じゃないし、やめたほうがいいよ」

今にして思えば、彼なりの優しさだった。昔付き合っていた人が機械に恋をするなんて、確かに、思わず引きとめてしまっただろう。けれど当時、カイトしか見えていなかったわたしには、彼の言葉は神経を逆なでするものでしかなかった。

「何も知らないくせに、言わないで！ カイトはちゃんとわたしのこと好きでいてくれてるんだから」

「だとしても、やっぱり機械は機械でしかないって。俺の知り合いにもそういう奴いて、結局すげえ落ち込んでたから……」

「カイトは違う！」

確かに理解してくれなかったけれど、ちゃんと自分で考えて受け入れてくれた。その証拠にわたしが、例え有名人でも男の容姿を褒めれば、妬いてくれるようになった。

「何だよ、違うって。同じだろ、機械だろ！ 結局落ち込むのはお前なんだから、やめとけて！」

「わっ！」

日頃は優しいけれど、短気なところが悪い人だった。突き飛ばされた拍子、棚に飾ってあった花瓶にぶつかる。がしゃんと音がして、

左の手の甲に熱が走った。

「じつ、じめ……」

「どうしたんですか？」

「っ……カイト」

わたしの声に反応してか、カイトが二階から降りて来た。わたしを見た瞬間、その顔色が変わる。

「何を、してるんですか？」

カイトが元彼を見る。それは感情のない、冷たい目だった。カイトがこんな目をするなんて初めてのことだった。

「お、俺はっ、こいつがあんたにはまってるから、説得しようって……思わず突き飛ばしちゃってっ……」

どうしていいのかわからないのだろう。真っ青な彼の首を、カイトの手がつかむ。

「彼女を傷つける人は、誰であつても許さない」

みるみるうちにカイトの指先が彼の首に沈み出して、わたしは慌てて声を張り上げた。このままでは、本当に死んでしまう。破片で切った痛みなんて忘れるほどだった。

「カイト！ やめて、大丈夫だから」

「でも」

「ちよつと切つただけ。やめて、早く離して。お願い」

「……あなたがそう言うなら」

カイトは渋々、手を離れた。彼が玄関先に尻餅をつく。その顔は青く、必死にせいぜいと息をしている。近くで見なくとも、はつきりとわかるくらい震えていた。

「早く帰って！」

わたしの声に、彼が足をもつれさせながらも弾かれたように飛び出していく。

「本当に大丈夫ですか？ 顔色が悪いですけど……早く、傷の手当てを」

先ほどの冷たい声は、本当にカイトが発したのだろうか。そう疑

つてしまうほどに、優しい声かけられる。わたしは両手を握り締める、カイトに言った。

「カイト、なんであんなことしたの。ほんとに死んじゃったらどうするの」

「だって僕からあなたを奪おうとしたんだ。その上、あなたを傷つけて……あなたがいない世界なんて、僕には考えられません」

「それでも、あんなことはしちゃだめだよ」

「じゃあ××は、僕がいなくなっても平気なんですか？」

「そういうわけじゃ……」

「あいつはあなたを傷つけたんだ。許せるわけがない」

どうしてそんなことを言うんだろう。困って目を逸らしたそのとき、がくと体が揺れた。鈍い衝撃が背を打つ。カイトがわたしに覆いかぶさっていた。

「僕は、××のこと愛していて何だってできる。あなたが傷つくのはいやだしあなたを失ったら存在する意味がない」

「カイト……？ どうしたの急に、おかしいよ」

ばち、と妙な音が聞こえた気がした。カイトの青い目が、いつそう濃い青色に染まる。

「おかしい？ 愛してる人がいないと苦しいのが、そんなにおかしいんですか？」

「違う、そうじゃなくて」

「僕はあなたを愛してる。あなただけを。あなたがいればそれでいいのに」

「カイト」

カイトがわたしに口付ける。舌を絡め取られ、呼吸さえ許されない。その合間に、首筋を指先が撫ぜた。てのひらが首にはりついて、ゆっくりと力が込められてゆく。

わたしを、殺すのだろうか。どうして。

「あなたなんか死んでしまえばいい。僕を必要としてくれない××なんて」

大好きな声で囁かれた言葉は、わたしの心を容赦なく引き裂いた。相変わらずのきれいな顔で、カイトは愛と狂気の混ざった言葉を囁く。わたしは成す術もなくカイトを見つめる。ふいに涙が溢れてこめかみを伝った。ぼたぼたと、文字通り溢れてくる。

「カイト」

その声はきつと音にならなかつただろう。わたしは手を伸ばす。涙で視界がにじんで青色しかわからなかつたから、青色だけを頼りに、その頬に手を伸ばした。

「カイト……愛して、る」

きちんと言えたのだろうか。そこで意識が途絶えた上、目を覚ますとカイトは廃棄されていたので、確かめる方法はない。

あるとすれば、先生がこっそり残しておいてくれた、メモリーカードを頼るのみだ。

【12・07】

だから、このカードを捨てられずにいるのかもしれない。ここには、あのとときの答えがある。わたしはカイトに確かめたい。生まれて初めて告げた愛の言葉は、幼くとも真剣だった想いは、カイトに届いたのだろうか。

今ならもつとうまくできる気がする。カイトをあんなふうに不安にさせないで、落ちついた愛情を与えてあげられるような、気がする。

手を伸ばして、電源の入っていないカイトの額に触れる。カード

はここにある。入れ換えるだけ。入れ換えて、尋ねて、それで今のカイトともども手放してしまえば、少なくともわたしは過去を切り離せる。あの人だけを見ることができる。

でもそこに、何が残るだろう。来ないあの人をひとりで待ち続けて、そうして年を取っていくのだろうか。カイトと一緒にいても昔を思い出してしまうばかりで、大切にしてあげられなくて、ただ手放しても結局寂しいだけだ。

わたしは、小さく声を上げて笑った。なんだ。自分のことしか考えていないじゃないか。優しくなんてない臆病者は、いつそ臆病者らしく振る舞えばいいじゃないか。

カードを抜こうとしたその瞬間、電源が入っていないはずのカイトが、目を開いた。

【12・07】

誰かが泣いている。遠くで泣き声が聞こえるのに、どこで泣いているのかわからない。誰が泣いているのかだって、わからない。それでも気になって気になって、僕は必死に探していた。

ようやく見つけた泣いている誰かは、あどけない空気を持つ少女だった。自分自身を抱くようにして膝に顔をうずめている。顔は見えないけれど、きっとまだ成人もしていないだろう。

「……どうしたの？」

声をかけると、少女は首を横に振った。なんでもない。そんな声が聞こえた気がした。

「なんでもないのに泣いたりしないよ。僕でよかったら、話を聞くから」

どうしていいかわからないことがある。少女は涙の合間にそう言った。

「君がしたいように、してごらん」

「でもそれは間違っているかもしれないの」

「どれが正しくてどれが間違ってるかなんて、きっと誰にもわからないんじゃないかな」

いつの間にか、彼女の声が聞こえるようになっていた。高くて、少し甘くて、心地良くなる声だ。

「でももう、どうしていいか、わからない」

少女が涙をぬぐう。顔を上げる。その顔を見て、僕は驚いた。

「助けて」

いつの間にか、少女の姿が、面影を残した女性へと変わる。マスタ―だった。

だから目の前で僕の額に触れている彼女を見たとき、これは続き

だろうか、と思った。それにしてもソファ―ベッドの感触や、触れる指先の冷たさが鮮明だ。

「カイト……どうして」

「マスター」

僕はマスターの冷たい手をつかむ。その肩がびくりと揺れる。

「あなたのように、してください。僕はあなたが決めたことなら、それでいい」

マスターが何について悩んでいるのか、わからない。それでも何かを迷っていて、困っていることだけはわかった。

マスターの強張っていた表情が、みるみるうちに崩れていく。あ、思ったときには、涙がぼろぼろとこぼれ出していた。

「そんなこと、言わないでよ……」

僕はとりあえず「ごめんなさい」と呟いて、少しの逡巡のあと彼女を抱きしめた。想像よりずっと細い肩が腕の中で震えている。それでも伝わってくる体温の心地良さに、そのやわらかさに、髪の毛の匂いに、眩暈がするようだった。

僕は、マスターが好きだ。

【12・07】

ひとしきり泣いたあと、マスターはごめんなさいと呟いた。その様子が本当に申し訳なさそうで、むしろ僕の胸が痛むほどだった。そっと僕の胸を押して腕の中から抜け出そうとするので、僕もそっと腕に力を込めて抵抗を試みる。拒まれたらどうしようという思い

もあつた。だけど臆病なのを理由に向かい合っていないのは、いやだった。

「……ええと、カイト？」

「僕はあなたが好きです」

「うん？」

「すごく好きです」

左腕で肩を抱いて、右手で包むよう頭を撫でる。マスターはしばらくされるがままになっていたけれど、突然暴れ出した。

「やめて離してあっち行ってやだやだ！」

「うわっ、マスター、どうしたんですか急に」

「どうしたのはあなたのほうじゃない！ 感情は持たないでっつたのに」

「表現しないことはできても、持たないでいることはできないんです。そういう作りになってるんです。だから感情を言動には表さなくても、本当はちゃんというんな感情を感じてたんです」

慌てて説明をすれば、マスターは動きを止めて僕を見た。ぽかんとしている。泣き顔といい、マスターの無防備な表情をたくさん見ることができている気がする。

「そ、そうなの……？」

「はい。ですから僕は、ずっとあなたの言いつけ通りのボーカロイドにならなきゃと思っについて」

「……………そう、だったんだ」

僕の腕の中で、マスターがようやく落ちつきを取り戻した。かと思つと、がばつと頭を下げる。

「ごめんなさい」

「マスターは悪いことなんて、何もしてませんよ」

「ううん。それってすごく辛かったと思う。わたしのわがままを押しつけてたなんて」

「マスターにはマスターなりの、事情があつたんでしょう？」

マスターは事情というか、と呟いて、ぼつりぼつりと話をしてく

れた。それは七年ほど前に使っていたボーカロイドの話だった。そのカイトが好きだったということ、おかしくなってしまうということ、メモリーカードが手元に残っているということ。

そしてそれを僕に差し込めば、僕は七年前のカイトになるということ。

「わたしはやっぱり、先輩からカイトを受け取るべきじゃ」

「マスター。それ以上は、言わないでください」

「……ごめん」

謝らせてばかりだ。本当は笑ってほしいのに。

「マスターは、答えを知りたいんでしょう」

「そうだけど」

「なら差し換えてください。僕はあなたの気持ちを何より優先したいんです」

「……………」

マスターはやはりためらっているようだった。僕はそつと彼女を抱きしめていた腕を、解放する。

「遠慮なんてしないでください。僕は喜んで、七年前の僕になります」

【12・07】

もし今のカイトに、七年前のカイトのデータを入れたら、もしかしたら今のカイトは存在することができなくなるかもしれない。七年前のカイトは、愛情を覚えてからというもの、わたしに対する執

着心が常識を越えていた。そのカイトが、前のカイトに戻ろうとするはずがない。今のカイトの体を奪い、ここで暮らし続けようとするはずだ。

やっぱり、できない。自分のことを好きだと言ってくれた人を無下に扱うなんて、できない。例えば相手が仮初の感情しか持つことのできない機械であつても、その好意までが仮初だとは思えない。

「それでも、だめだよ。わたしにはできない」

カイトはその答えが予測できていたようだった。そうですか、とうなずくと、わたしの手を両手で触れる。カードを握っていたてのひらを開かれた。

「僕は、できません」

「やめて、カイト！」

カイトの動きは速かった。額からカードを抜き取ると、わたしのカードを奪い取ってそこへ差し入れる。カイトの目が閉ざされる。

静かな室内に低い電子音が響いて、しばらくカイトは動かなかつた。せつかく諦めがつきそうだったのに、どうしてこんなことをしたのだろう。カイトの腕に手を置くと、少しだけ揺さぶってみる。

「……カイト？　ねえ、壊れちゃったの？」

「
ゆっくりとカイトの目が開かれる。青い目がわたしを見た。濃い青色の目だ。」

「x x。会いたかつた」

カイトはわたしの名前を知らない。カイトは濃い青色の目じゃない。七年前のカイトになつてしまったのだ。

言葉を失うわたしに微笑んで、カイトは左手を取ると、甲に残った傷跡へ口付ける。わたしはずっと、こうしてほしかった。あの人に。わたしのことを愛してくれる人に。醜い部分も受け入れてほしいと、過去さえ語らずに、そう思っていた。なんて傲慢だったんだろう。

「カイト……」

「泣かないでください。僕はあなたの笑顔が見たくて、ここにいるんです」

頬を撫でる手は優しい。優しくて優しくて、いつだってわたしをいちばんに考えてくれて、そのせいで壊れてしまった。

「ごめんね」

「どうして謝るんですか？ 変な××」

「もしかして、覚えてないの……？」

「いいえ、ちゃんと覚えてます。出会った日のことも、あなたから離れてしまった日のことも。先生が記憶を残してくれると言ったときのことだって、忘れてません」

カイトは笑った。カイトが愛情を理解できなくて、それでも満足していられた日の、穏やかな笑顔そのものだった。だけど目はあのと時のような色だ。どうということだろう。

「廃棄される前に、先生がデータを書き換えてくれたんです。僕にはそもそも、愛情という感覚は備わってなかったし、新しく生まれた感情を抱いておけるだけの容量だってなかった。先生が、いつか再び必要とされる日が来るはずだと言って、僕のデータを守ってくれたんです」

先生の、あのと時の嬉しげな表情が蘇る。七年待った甲斐があったと言ってくれた。七年間、カイトを守ってくれていたのだ。

カイトのデータが残っていると知らされたのは、あの日から半年後のことだった。

カイトのいない現実によく慣れたころ、先生が家に訪ねて来たのだ。当時、先生は機械の廃棄を請け負っていて、様々な機械を解体しては新しい存在に生まれ変わらせていた。あんなことがあった後だから、両親は何一つ残さないようにと先生に頼んだらしいけれど、カイト自身と話をしてみても先生はデータを残すことにしなかった。らしい。

「いつか彼にもう一度会いたいと思ったら、来てください」

先生はそう言って名刺を渡してくれた。わたしは、いなくなつた

はずのカイトが助かって嬉しかったけれど、もう一度カイトと過すには心が弱すぎて、結局カイトを引き取ることはできずにいた。

七年が過ぎて、新しいカイトと出会って、ようやく記憶を引き取ろうと思えたのだ。

「僕は、もう一度あなたに会えて嬉しい。あなたの手元にいられたことが、幸せでたまらないんです。だから自分を責めないでください」

わたしはまた溢れてきた涙をぬぐって、うなずいた。全てわたしのわがままが引き起こしたことなのに、許してくれるカイトが愛しかった。

「ねえ、カイト。わたしの言葉は、届いてた？」

「僕が、あなたの言葉を聞き逃すと思いますか？」

思わない。そう答えると、カイトは「でしょう」と自信満々にうなずいた。わたしは笑って、カイトに抱きつく。

「ずっとカイトのこと好きだったよ」

「ありがとう。僕もずっと、xxを愛していました」

しっかりと抱き返されて、嬉しいと思うと同時に、困っている部分もあった。この体は今のカイトのもので、七年前のカイトのものじゃない。カイトとずっと一緒にいたいけれど、やっぱりそれは、できない。

「xx。メモリーカードを、戻してください」

わたしの考えを察したのか、カイトが言う。頭のすぐ近くで響く声が心地良く、切なかった。

「そして僕の記憶は、あなたの手で消してください」

「できない」

「あなたの手で消し去ってほしいんです」

「そんな、カイトを殺すようなこと、できるわけない」

「あなたに殺されるなら、本望です」

わたしは駄々をこねる子どものように、いやいやと首を振った。

何があってもそれだけはできない。カイトの手が、わたしの背中を

ぼんぼんと優しく叩く。

「僕を困らせないで。いい子だから、x x」

そんなふうには穏やかな声で頼まれて、名前を呼ばれたらもう何も言えなくなってしまう。約束はしないかわりにいやとも言えないで、わたしは黙り込んだ。

「今の僕も、きつと賛成してくれます。あなたのことは今の僕が支えてくれる。だから大丈夫です」

「カイト……」

「きれいになりましたね。だけど変な男にだけは引つかからないでください」

「もう、子どもじゃないんだから」

「僕はあなたが大好きですから、やきもちを妬いてしまつんです」
わたしがずっとほしかつたものだ。まさか七年後にしてまともなやきもちをもらえるなんて、思ってもいなかったけれど。

「幸せになつて、x x」

カイトはわたしの頭を撫でると、自らの手でメモリーカードを入れ換える。わたしは止めてしまいそうになる体を必死に抑えて、カイトの目の色を必死に瞼にやきつけた。

故郷に広がる海によく似た、青だった。

【12・07】

何となくだけれど、胸の奥にぼんやりとあたたかいものが残っている。きつとこれは、前の僕の心だ。

目を開くとマスターが泣いていて、予想はできていたけれど辛かった。抱きしめるといつそう泣き声は大きくなって、泣きやむまでずっとそうしていた。

30分ほどして泣きやんだマスターは、前の僕と何を話したのか、ゆっくりと教えてくれた。僕の言いそうなことだと納得する。

「消すなんて、やだよ……」

「でもそれが願いなんでしよう」

「それでもやだ」

頑なな態度に、少しだけ妬ける。こんなに大切に思われているのに僕に換わるなんて、前の僕はずるい。

「やっぱり、もう一度差し換えましょうか。もう差し換えられないようにロックすることだって、しようと思えばできます」

「え……」

「そうすれば、完璧に昔の僕でいられます。僕は、それでも構いません」

マスターが求めているのは昔の僕だ。今の僕がいたところで、好きだと思いつけるだけで、何かしてやれる自信はない。マスターはじつと僕を見ていたかと思うと、突然声を張り上げた。

「ふざけないで！ わたしは今のカイトだって大事なの、できるわけがないじゃない！」

「ご、ごめんなさい」

迫力に負けて思わず謝ると、マスターは小さく、けれど強い口調で言った。

「……その気持ちだけは受け取るけど、そんなことしない。前のカイトのデータだって消さない」

だけどデータが残っていれば、彼恋しさにまたマスターは差し換えてしまうだろう。それは自分で自分を追い詰めることになるし、何より前の僕がいやがるに違いない。身を引いた彼の気持ちだって、汲んであげたい。

「二人が一緒にいてくれればいいのに」

「警沢ですね」

「だって……」

そう思ってしまうマスターの気持ちもわからなくはないけれど、思わず苦笑してしまう。

ふと、マスターのその言葉にひらめくものがあった。

「そうだ。マスター、一緒になってしまえばいいんです」

「え？」

「昔と今の僕が、一人になってしまえばいいんですよ」

【12・07】

カイトの提案は、前のカイトのデータを守ってくれた技師に頼んで、前と今のメモリーカードを一つにしようというつもりだった。そんなことできるのかわからないし、聞いたこともない。

だけど可能性があるのなら、そうしようと思った。わたしとカイトの意見が一致した。善は急げということの家を飛び出し電車に乗ると、故郷へ向かう。まともな遠出なんて、久しぶりだ。

「ここが、マスターと前の僕が暮らしていた場所なんですね」

カイトはそう言って、まだどこか田舎っぽさの残る町を見回していた。都会から来たのに、逆に田舎の人みたいでおかしい。

「先生のいるところはこっち」

町の中心部にありながらも目立たない建物へと入る。どくどくと鼓動がうるさい。震える指でインターホンを押すと、はい、と落ちついた声で反応があった。先生だ。

「サトウです。お願いがあつて来ました」

突然の来訪に驚くこともなく、先生はドアを開けてくれた。わたしの姿を見、そして背後にいるカイトを見て、わずかに驚いたようだったけれど、すぐに元の表情へと戻る。

「これはこれは。中で話を伺いましょうか」

室内に通されて、わたしは二人のカイトの記憶をひとつにできないかと尋ねた。いろんなことを話したかったけれど、まずはそれを知りたかった。

「可能であると思いますよ」

「本当ですか？」

「ええ。幸いなことに、二つのデータは日付や時刻が重なっていません。それに同じK A I T Oですから、拒否反応も出ないでしょう」

「よかったです……」

カイトもまたほつとして強張った表情を崩す。だけど先生は、ただし、と付け加えた。

「もし万が一、失敗すれば、二人のデータが全て消えることになります。メモリーカードは繊細ですから、外部でバックアップを取ることもできません。二人同時のバックアップはできませんから、どちらか一人のバックアップを本体で行っておくことをおすすめします」

成功して二人のデータが一つになるか、失敗して二人とも失うか、もしくは一人だけが残るのか。

カイトはすぐに「昔の僕のデータだけでもバックアップしましょう」と言い出したけれど、そんなことできるわけがない。どちらか一方なんて選べない。

「……わたしは、先生の技術を信じます。それに、カイトたちのことも、信じてる」

「マスター」

「いい顔をするようになりましたね。わかりました、では早速ですが、しばらくカイト君を預かります」

わたしはうなずく。そしてカイトを、まっすぐに見つめた。

「カイト、わたし待ってるから。帰ってきたら、一緒にコートを買
いに行ってくれる？」

「もちろんです、マスター。待っててくださいね」

約束は、叶わなかったときが辛いからあまりしないのだけど、もう大丈夫だと思った。カイトとなら、何度でもどんな約束だってできる。絶対に破られることはない、信じられるから。

1223

【12・23】

通帳とにらみ合う。カイトのデータ統合費用がこれくらいで、これから必要になりそうな生活費を計算し、更には敷金礼金のことも考えてみると、相当ギリギリだった。ああでもここを売り払ってしまえるから、少しは足しになるかな。しばらく新しい服も靴もコスメも全部がまん。ファッション誌も立ち読みでがまん。せつかくあと二日で初めてのクリスマスなのに、タイミングがいいのか悪いのか。

そんなことを考えていると、電話が鳴った。

【12・23】

目を閉ざして横たわっている姿は、どちらのカイトなのか判断つかない。

「二人の記憶を持っているのですから、ある意味では新しいカイト君と言えるかもしれません」

悩むわたしに、先生が笑った。そうですねとうなずく。過去も現在も受け入れて、新しく生まれ変わったのだ。カイトも、わたしも。

「さあ、どつぞ」

「はい」

手を伸ばして、首の後ろの電源を押す。低い電子音が響いて、やがてゆっくりとカイトが目を開く。濃い青色。海に似た色の目だ。

「……………おはようございます」

カイトがわたしを見て、笑う。眩しげな笑顔だった。わたしは彼の手を、両手でしっかりと握る。

「おはよう、カイト」

「ずっと、あなたのことばかり考えてました」

知ってる。うなずいたとたん抱きしめられて、わたしは横たわったカイトに覆い被さる形となった。

「ずっとずっと、こうしたかった　あめ」

慈しむように名前を呼ばれて、わたしは肩の力を抜いた。

【12・23】

薄いコートの裾が冷たい風にはためく。12月も終わりに近づけば、どんなに厚着したところで寒さをしのげはしない。

「佐藤雨なんて、字面変えたら砂糖飴じゃない。それでずっとからかわれてたの」

名前がきらいな理由を、カイトは知らないままだった。七年前にも言わなかったし、七年後は名乗りもしなかったから。

わたしはアスファルトを眺めながら言った。背後から、カイトの声が答える。

「甘くておいしそうじゃないですか」

「そういう問題じゃないよ。思春期の少女にとっては重要だったん

だから」

「実際に、雨ってなんだか甘いし」

「もう、何言ってるの」

振り返ると、カイトが真顔で「雨の肌ってなんだか甘いんですよ」と言った。その顔があまりに真剣なので、わたしは思わず気恥ずかしくなつて前を向く。街中でそんな発言するなんて、誰が聞いているかわからないのに。

橋に差しかかったところで、わたしは足を止めた。手すりに手を置くと、橋の下に流れる川を眺める。大きくて、深い。

「一度してみたかったの」

わたしは隣に立つカイトを見上げる。カイトもうなずいた。

左手から指輪を外すと、川へ向かって思い切り投げた。きらり。川に落ちる直前、陽を受けて光った。小さな波紋を立てて、消える。こんなに呆気ない存在だったのだ。

「新しいコートは、どんなのがいいかな」

しばらくそれを眺めていたけれど、わたしは再び歩き出すと、隣を歩くカイトに尋ねた。

「雨は、どんなものでも似合いますよ」

「言つと思つた」

笑つと、カイトがわたしの指先に、するりと自分のそれを絡めてきた。カイトのあたたかい体温が、ゆっくりと移ってくるのが心地良い。

「カイト、」

小さく呟いた言葉に、カイトは微笑んだ。今まで見たどんな表情よりも、穏やかだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4020w/>

濃青のニコード

2011年9月4日03時30分発行